



Title	大阪の風土が生んだネットワークの達人
Author(s)	中村, 安秀
Citation	井戸武實の歩みと追悼集. 2025, p. 31
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/100732
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪の風土が生んだネットワークの達人

中村 安秀

公益社団法人日本 WHO 協会理事長

E-mail:yastisch@gmail.com

1. 笑いの輪の中に、いつも井戸さんがいました

公益社団法人日本 WHO 協会は、井戸武實さんには本当にお世話になりました。2016 年度からは公益財団法人大阪公衆衛生協会として賛助法人会員になっていただき、その後は賛助個人会員としての活動を支えていただきました。日本 WHO 協会が、「関西グローバルヘルスの集い」を定期的に開催した 2019 年以降、少なくとも 12 回以上はセミナーに参加いただきました。グローバルヘルスに関心を持つ若い医学生や看護学生に交じって、ワークショップで付箋を片手に模造紙に貼り付けている楽しそうな井戸さん。会場から大きな笑いが起きたとき、輪の中にはいつも井戸さんの姿がありました。年齢を問わず、性別を問わず、国籍や民族を問わず、人とつながることが大好きな井戸さん。日本 WHO 協会が毎年 4 月 7 日に開催している世界健康デー祝祭にもよく顔を出していただきました。今年（2025 年 4 月 7 日）の世界健康デー・イベントには、いつも誰かとおしゃべりしている、にぎやかな井戸さんの姿を拝見できないと思うと寂しさが募ります。

2. 結核にかける井戸さんの熱い思い

井戸武實さんは、結核対策のプロフェッショナルです。『目で見る WHO』（2020 年夏号）に「外国生まれの結核患者の増加とその対策を考える」を執筆いただきました。ストップ結核パートナーシップ関西のワークショップをまとめたものですが、いま読み返してみると、後輩たちに向けた井戸さんからの貴重なメッセージとして受け止めました。（全文は本追悼集の資料④に掲載）

3. 軽妙なフットワークの井戸さんが「要」となった多職種ネットワーク

個人的なことになりますが、私は、和歌山県田辺市で生まれ、中学・高校は大阪で育ち、大学以降は東京で仕事をしてきました。その後、大阪大学に職を得て、関西に戻ったときに、関西は、成果が定まっていない新しい取り組みを面白がる風潮があり、多職種で新しい組織を作りあげるときの垣根が低いことに気づかされました。人と人が交わるところから、なにか新しいものが始まるという発想が、人々の深層を流れているのです。

結核対策、大阪公衆衛生協会、ストップ結核パートナーシップ関西。井戸さんが紡いできた人から人へ、組織から組織へというつながり。いまの言葉でいえば、多様性、公平性、包摶といった DEI (Diversity, Equity and Inclusion) に集約されるのでしょう。そんな言葉が人口に膚浅かいしやくされていなかつた時代に、井戸さんは軽妙なフットワークで、背景も個性も異なる人と人をつなぎ、水と油のように性質や規模も異なる組織を結び合わせてきました。いま、多職種ネットワークという用語が飛び交っていますが、本当の意味でお互いに信頼と安心を分かち合うことのできるネットワークはまだまだ希少です。井戸さんが大阪に残してくれた多職種ネットワークという貴重な財産を大切に育み、次世代に継続していくことこそ、井戸さんと同時代を過ごした私たちの責務であると痛感しています。